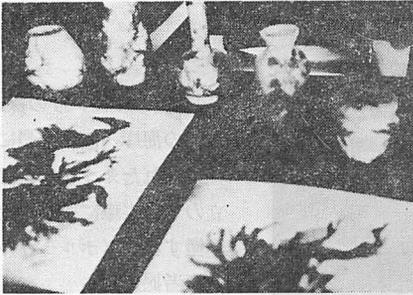


ナザレの保養地、漁村を通過してしばらくすると São Martinho do Porto という漁村に着く。ここは湾内の奥にある漁村であるが、この辺一帯の海岸には驚いたことに見渡すかぎり一面にオゴノリが多量に打揚げられて堆積している。之を二頭立の二輪牛車に大きな鋤でつまみあげて採取する。これも全部日本に輸出されるとのことである。

モナコ海洋博物館の海藻展示

瀬 木 紀 男*

T. SEGI : Algal exhibit at Monaco Oceanographic Museum



モナコ海洋博物館の海藻展示
前面には紙に附着させた腊葉標本を
ならべてあるが、後方には各種の花
瓶に海藻類を貼付し美しく展示され
ている。(モナコにて筆者撮影)

筆者が有名なモナコ海洋博物館を先年訪問した時、海藻関係について、本邦では未だ見られない興味ある展示があったので御紹介する。即ち紙上につくられた普通の腊葉標本の展示の他に、ここでは、写真に示す如く種々の形をした陶磁器製の白色の花瓶に、アオノリ *Enteromorpha*、アサクサノリ *Porphyra*、イトグサ *Polysiphonia* を表面に夫々附着させて美しく見せている。ヨーロッパ式のいかにも芸術的な着想として興味深かった。

カーン女史の来学

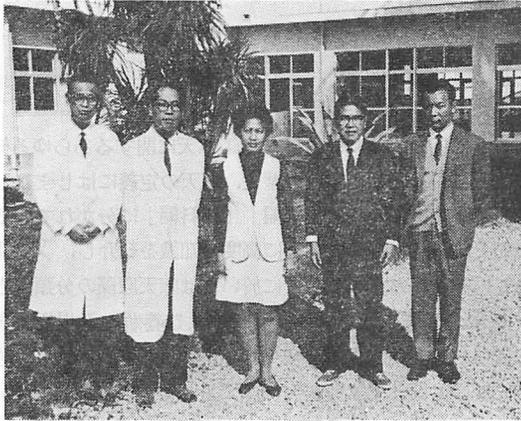
瀬 木 紀 男*

T. SEGI : Mrs. KHAN LEWMANOMONT's visit to Prefectural University of Mie

タイ国バンコクの国立カセサ大学水産学部講師カーン女史 (Mrs. KHAN LEWMANOMONT) が昨年10月中旬ユネスコから招聘されて藻類研究のため新装なった本学を訪れた。

* 三重県立大学水産学部 (津市江戸橋二丁目)

日本には約2カ月間、本学と東大へ留学生として来日したものである。かつて筆者がカセサ大学を訪問した時、水産学部長チンダ・ティエマー博士とチョンブリ地方のシーラチャー海岸へ採集旅行をしたが、その折同行した既知の人である。女史は国立医大薬学部を卒業後、先年アメリカのミシガン大学へ留学した時は動物学方面も研究された博学の士で英会話もうまく、現在はカセサ大学で水産植物学を担当している。本学滞在中は主として持参したタイ国の海藻類を WEBER VAN BOSSE のリストにもとづき研究した。この間タ



右より喜田、瀬木、カーン、上野、谷口の各氏
(三重県立大学水産学部にて)

イ国の海藻について興味ある話題を我々に提供し、殊に海雹菜(中国よりの密輸入のもの)アマノリ(自生の大きなもの)、トゲイギス(囊果を有するもの)などを興味深く観察することが出来た。タイ国でも南方の人々はオゴノリ、イワヅタ、ノリなどの海藻類を食用とする由であるが食べ方は我々と異なるものがある。オゴノリやイワヅタは生のままで、胡椒、レモン、ニンニクを加えた Shrimp paste を半流動体にひきつぶしたものにつけて食べ、又、ノリは生のまま、或いは日光で乾燥し、木炭で焼き、水煮したり、豚肉とスープに入れたりして食べるとのことであった。ラッパモクの名を教えた時突然爆笑したのはに驚いた。ラッパという発音はタイ国ではタコを意味するとのことである。

なお、タイ国には8つの国立大学があるのみで私立大学は1つもないとのことであった。滞在中鳥羽、国崎、長島方面への採集旅行、白子の海苔場見学、岐阜県山岡町の寒天研究所及び工場見学など盛り沢山のプログラムを終了して12月中旬夫君(タイ国内務省官吏)と共に帰国した。